山椒魚

山椒魚は悲しんだ。

彼は彼の棲家である岩屋から外に出てみようとしたのであるが、頭が出口につかへて外に出ることができなかつたのである。今は最早、彼にとつては永遠の棲家である岩屋は、出入口のところがそんなに狭かつた。そして、ほの暗かつた。強ひて出て行かうとこゝろみると、彼の頭は出入口を塞ぐコロツプの栓となるにすぎなくて、それはまる二年の間に彼の体が発育した証拠にこそはなつたが、彼を狼狽させ且つ悲しますには十分であつたのだ。

「何たる失策であることか！」

彼は岩屋のなかを許されるかぎり広く泳ぎまはつてみようとした。人々は思ひぞ屈した場合、部屋のなかを屢々こんな具合に歩きまはるものである。けれど山椒魚の棲家は、泳ぎまはるべくあまりに広くなかつた。彼は体を前後左右に動かすことができたゞけである。その結果、岩屋の壁は水あかにまみれて滑かに感触されたので、彼は彼自身の背中や尻尾や腹に、つひに苔が生えてしまつたと信じた。彼は深い嘆息をもらしたが、恰も一つの決心がついたかのごとく呟いた。

「いよいよ出られないといふならば、俺にも相当な考へがあるんだ。」

しかし彼に何一つとしてうまい考へがある道理はなかつたのである。

岩屋の天井には、杉苔と銭苔とが密生して、銭苔は緑色の鱗でもつて地所とり（小児の遊戯の一種）の形式で繁殖し、杉苔は最も細く且つ紅色の花柄の尖端に、可憐な花を咲かせた。可憐な花は可憐な実を結び、それは隠花植物の種子散布の法則通り、間もなく花粉を散らせはじめた。

山椒魚は、杉苔や銭苔を眺めることを好まなかつた。寧ろそれ等を疎んじさへした。杉苔の花粉はしきりに岩屋のなかの水面に散つたので、彼は自分の住家の水が濁れてしまふと信じたからである。剰へ岩や天井の窪みには、一群づゝの黴さへも生えた。黴は何と愚かな習性を持つてゐたことであらう。常に消えたり生えたりして、絶対に繁殖して行かうとする意志はないかのやうであつた。山椒魚は岩屋の出入口に顔をくつゝけて、岩屋の外の光景を眺めることを好んだのである。ほの暗い場所から明るい場所をのぞき見することは、これは興味深いことではないか。そして小さな窓からのぞき見するほど、常に多くの物を見ることはできないのである。

谷川といふものは、目茶々々な急流となつて流れ去つたり、意外なところで大きな淀みをつくつてゐるものらしい。山椒魚は岩屋の出入口から、谷川の大きな淀みを眺めることができた。そこでは水底に生えた一叢の藻が朗かな発育を遂げて、一本づゝの細い茎でもつて水底から水面まで一直線に延びてゐた。そして水面に達すると突然その発育を中止して、水面から空中に藻の花をのぞかせてゐるのである。多くの目高達は、藻の茎の間を泳ぎぬけることを好んだらしく、彼等は茎の林のなかに群をつくつて、互に流れに押し流されまいと努力した。そして彼等の一群は右によろめいたり左によろめいたりして、彼等のうちの或る一ぴきが誤つて左によろめくと、他の多くのものは他のものに後れまいとして一せいに左によろめいた。若し或る一ぴきが藻の茎に邪魔されて右によろめかなければならなかつたとすれば、他の多くの小魚達はことごとく、こゝを先途と右によろめいた。それ故、彼等のうちの或る一ぴきだけが、他の多くの仲間から自由に遁走して行くことは甚だ困難であるらしかつた。

山椒魚は、これ等の小魚達を眺めながら彼等を嘲笑してしまつた。

つゝけて、岩屋の外の光景を眺めることを好んだのである。ほの暗い場所から明るい場所をのぞき見することは、これは興味深いことではないか。そして小さな窓からのぞき見するほど、常に多くの物を見ることはできないのである。

谷川といふものは、目茶々々な急流となつて流れ去つたり、意外なところで大きな淀みをつくつてゐるものらしい。山椒魚は岩屋の出入口から、谷川の大きな淀みを眺めることができた。そこでは水底に生えた一叢の藻が朗かな発育を遂げて、一本づゝの細い茎でもつて水底から水面まで一直線に延びてゐた。そして水面に達すると突然その発育を中止して、水面から空中に藻の花をのぞかせてゐるのである。多くの目高達は、藻の茎の間を泳ぎぬけることを好んだらしく、彼等は茎の林のなかに群をつくつて、互に流れに押し流されまいと努力した。そして彼等の一群は右によろめいたり左によろめいたりして、彼等のうちの或る一ぴきが誤つて左によろめくと、他の多くのものは他のものに後れまいとして一せいに左によろめいた。若し或る一ぴきが藻の茎に邪魔されて右によろめかなければならなかつたとすれば、他の多くの小魚達はことごとく、こゝを先途と右によろめいた。それ故、彼等のうちの或る一ぴきだけが、他の多くの仲間から自由に遁走して行くことは甚だ困難であるらしかつた。

山椒魚は、これ等の小魚達を眺めながら彼等を嘲笑してしまつた。

「なんといふ不自由千万な奴等であらう！」

淀みの水面は絶えず緩慢な渦を描いてゐた。それは水面に散つた一片の白い花弁によつて証明できるであらう。白い花弁は淀みの水面に広く円周を描きながら、その円周を次第に小さくして行つた。そして速力をはやめた。最後に、極めて小さな円周を描いたが、その円周の中心点に於て、花弁自体は水のなかに消えてなくなつた。

山椒魚は今にも目がくらみさうだと呟いた。

或る夜、一ぴきの小蝦が岩屋のなかへまぎれ込んだ。この小動物は今や産卵期のまつたゞなかにあるらしく、透明な腹部一ぱいに恰も雀の稗草の種子に似た卵を抱へて、岩壁にすがりついた。さうして細長いその終りを見届けることができないやうに消えてゐる触手をふり動かしてゐたが、いかなる了見であるか彼は岩壁から跳びのき、二三回ほど巧みな宙返りをこゝろみて、今度は山椒魚の横つ腹にすがりついた。

山椒魚は小蝦がそこで何をしてゐるのか、ふりむいて見てやりたい衝動を覚えたが、彼は我慢した。ほんの少しでも彼が体を動かせば、この小動物は驚いて逃げ去つてしまつたであらう。

「だが、このみもちの虫けら同然のやつは、一たいこゝで何をしてゐるのだらう？」

この一ぴきの蝦は山椒魚の横腹を岩石だと思ひ込んで、そこに卵を産みつけてゐたのに相違ない。さもないならば、何か一生懸命に物思ひに耽つてゐたのであらう。山椒魚は得意げに言つた。

「くつたくしたり物思ひに耽つたりするやつは莫迦だよ。」

彼はどうしても岩屋の外に出なくてはならないと決心した。いつまでも考へ込んでゐるほど愚かなことはないではないか。今は冗談ごとの場合ではないのである。

彼は全身の力を込めて岩屋の出口に突進した。けれど彼の頭は出口の穴につかへて、そこに厳しくコロップの栓をつめる結果に終つてしまつた。それ故、コロップを抜くためには、彼は再び全身の力を込めて後に身を退かなければならなかつたのである。

この騒ぎのため、岩屋のなかではおびたゞしく水が濁れ、小蝦の狼狽といつては並たいていではなかつた。けれど小蝦は、彼が岩石であらうと信じてゐた棍棒の一端がいきなりコロップの栓となつたり抜けたりした光景に、ひどく失笑してしまつた。全く蝦といふ小動物ほど濁つた水のなかでよく笑ふ生物はゐないのである。

山椒魚は再びこゝろみた。それは再び徒労に終つた。何としても彼の頭は穴につかへたのである。

彼の目からは涙がながれた。

「あゝ神様！　あなたはなさけないことをなさいます。たつた二年間ほど私がうつかりしてゐたのに、その罰として、一生涯私をこの窖(あなぐら)に閉ぢこめてしまうとは横暴であります。私は今にも気が狂ひさうです。」

諸君は、発狂した山椒魚を見たことはないであらうが、この山椒魚に幾らかその傾向がなかつたとは誰がいへよう。諸君は、この山椒魚を嘲笑してはいけない。すでに彼が飽きるほど闇黒の浴槽につかりすぎて、最早がまんがならないでゐるのを、了解してやらなければならない。いかなる瘋癲病者も、自分の幽閉されてゐる部屋から解放してほしいと絶えず願つてゐるではないか。最も人間嫌ひな囚人でさへも、これと同じことを欲してゐるではないか。

「あゝ神様、何うして私だけがこんなにやくざな身の上でなければならないのです？」

岩屋の外では、水面に大小二ひきの水すましが遊んでゐた。彼等は小なるものが大なるものゝ背中に乗つ

山椒魚は再びこゝろみた。それは再び徒労に終つた。何としても彼の頭は穴につかへたのである。
彼の目からは涙がながれた。
「あゝ神様！　あなたはなさけないことをなさいます。たつた二年間ほど私がうつかりしてゐたのに、その罰として、一生涯私をこの窖（あなぐら）に閉ぢこめてしまうとは横暴であります。私は今にも気が狂ひさうです。」
諸君は、発狂した山椒魚を見たことはないであらうが、この山椒魚に幾らかその傾向がなかつたとは誰がいへよう。諸君は、この山椒魚を嘲笑してはいけない。すでに彼が飽きるほど闇黒の浴槽につかりすぎて、最早がまんがならないでゐるのを、了解してやらなければならない。いかなる瘋癲病者も、自分の幽閉されてゐる部屋から解放してほしいと絶えず願つてゐるではないか。最も人間嫌ひな囚人でさへも、これと同じことを欲してゐるではないか。
「あゝ神様、何うして私だけがこんなにやくざな身の上でなければならないのです？」

岩屋の外では、水面に大小二ひきの水すましが遊んでゐた。彼等は小なるものゝ背中に乗つかり、彼等は唐突な蛙の出現に驚かされて、出鱈目に直線を折りまげた形に逃げまはつた。蛙は水底から水面にむかつて勢ひよく律をつくつて突進したが、その三角形の鼻先を空中に現はすと、水底にむかつて再び突進したのである。
山椒魚はこれ等の活潑な動作と光景とを感動の瞳で眺めてゐたが、やがて彼は自分を感動させるものから寧ろ目を反むけた方がいゝといふことに気がついた。彼は目を閉ぢてみた。悲しかつた。彼は彼自身のことを譬へばブリキの切屑であると思つたのである。
誰しも自分自身をあまり愚かな言葉で譬へてみることは好まないであらう。たゞ不幸にその心をかきむしられる者のみが、自分自身はブリキの切屑だなぞと考へてみる。たしかに彼等は深くふところ手をして物思ひに耽つたり、手ににじんだ汗を屢々チョッキの胴で拭つたりして、彼等ほど各々好みのまゝの恰好をしがちなものはないのである。
山椒魚は閉ぢた目蓋を開かうとしなかつた。何となれば、彼には目蓋を開いたり閉ぢたりする自由とその可能とが与へられてゐたゞけであつたからなのだ。
その結果、彼の目蓋のなかではいかに合点のゆかないことが生じたではなかつたか！　目を閉ぢるといふ単なる形式が巨大な暗やみを決定してみせたのである。その暗やみは際限もなく拡がつた深淵であつた。誰しもこの深淵の深さや広さを言ひあてることはできないであらう。
――どうか諸君に再びお願ひがある。山椒魚がかゝる常識に没頭することを軽蔑したりルンペンだと言はないでゐたゞきたい。牢獄の見張人といへども、よほど気難しい時でなくては、終身懲役の囚人が徒らに嘆息をもらしたからといつて叱りつけはしない。
「あゝ寒いほど独りぼつちだ！」

注意深い心の持主であるならば、山椒魚のすゝり泣きの声が岩屋の外にもれてゐるのを聞きのがしはしなかつたであらう。

悲嘆にくれてゐるものを、いつまでもその状態に置いとくのは、よしわるしである。山椒魚はよくない性質を帯びて来たらしかつた。そして或る日のこと、岩屋の窓からまぎれこんだ一ぴきの蛙を外に出ることができないやうにした。蛙は山椒魚の頭が岩屋の窓にコロップの栓となつたので、狼狽のあまり岩壁によぢのぼり、天井にとびついて銭苔の鱗にすがりついた。この蛙といふのは淀みの水底から水面に、水面から水底に、勢ひよく往来して山椒魚を羨しがらせたところの蛙である。誤つて滑り落ちれば、そこには山椒魚の悪党が待つてゐる。

山椒魚は相手の動物を自分と同じ状態に置くことのできるのが痛快であつたのだ。

「一生涯こゝに閉ぢ込めてやるんだ！」

悪党の呪ひ言葉は或る期間だけでも効験がある。蛙は注意深い足どりで窪みにはひつた。そして彼は、これで大丈夫だと信じたので、窪みから顔だけ現はして、次のやうに言つた。

「俺は平気だぞ。」

「やい、出て来い！」

と山椒魚は呶鳴つた。さうして彼等は激しい口論をはじめたのである。

「出て行かうと行くまいと、こちらの勝手だ。」

「よろしい、いつまでも勝手にしてゐろ。」

「お前は莫迦だ。」

「お前は莫迦だ。」

「一生涯こゝに閉ぢ込めてやるんだ！」
悪党の呪ひ言葉は或る期間だけでも効験がある。蛙は注意深い足どりで窪みにはひつた。そして彼は、これで大丈夫だと信じたので、窪みから顔だけ現はして、次のやうに言つた。
「俺は平気だぞ。」
「やい、出て来い！」
と山椒魚は呶鳴つた。さうして彼等は激しい口論をはじめたのである。
「出て行かうと行くまいと、こちらの勝手だ。」
「よろしい、いつまでも勝手にしてゐろ。」
「お前は莫迦だ。」
「お前は莫迦だ。」

彼等はかゝる言葉を幾度となくくり返した、翌日も、その翌日も、同じ言葉で自分を主張し通してゐたわけである。

一年の月日が過ぎた。
初夏の水や温度は、岩屋の囚人達をして鉱物から生物に蘇らせた。そこで二箇の生物は、今年の夏いつぱいを次のやうに口論しつゞけたのである。山椒魚は岩屋の外に出て行くべく頭が肥大しすぎてゐたことを、すでに相手に見ぬかれてしまつてゐたらしい。
「お前こそ頭がつかへてそこから出て行けないだらう？」
「お前だつて、そこから出ては来れまい。」
「それならば、お前から出て行つてみろ。」
「お前こそ、そこから降りて来い。」

更に一年の月日が過ぎた。二箇の鉱物は再び二箇の生物に変化した。けれど彼等は、今年の夏はお互に黙り込んで、そしてお互に自分の嘆息が相手に聞こえないやうに注意してゐたのである。
ところが山椒魚よりも先に、岩の窪みの相手は、不注意にも深い嘆息をもらしてしまつた。それは「あゝあゝ」といふ最も小さな風の音であつた。去年と同じくしきりに杉苔の花粉の散る光景が、彼の嘆息を教唆したのである。
山椒魚がこれを聞きのがす道理はなかつた。彼は上の方を見上げ、且つ友情を瞳に込めてたづねた。
「お前は、さつき大きな息をしたらう？」
相手は自分を鞭韃して答へた。

「それがどうした?」
「そんな返辞をするな。もう、そこから降りて来てもよろしい。」
「空腹で動けない。」
「それでは、もう駄目なやうか?」
相手は答へた。
「もう駄目なやうだ。」
よほど暫くしてから山椒魚はたづねた。
「お前は今どういふことを考へてゐるやうなのだらうか?」
相手は極めて遠慮がちに答へた。
「今でもべつにお前のことをおこつてはゐないんだ。」